

「ビデオ制作」プロジェクトを通した 日本語学習の可能性

——国際部 Aural-Oral Workshop での試みをもとに——

保 坂 敏 子

はじめに

1998 年春学期、国際部の J3 から J6 レベルを対象にした Aural-Oral Workshop (以下 A-OW) において、「ビデオ制作」プロジェクトを最終行動目標に据えた授業を行い、「若者言葉に関するインタビュー番組」を制作した。このワークショップ本来の目的は、聴解力と口頭表現力の統合的運用能力の養成である。今回は、春学期が学習者にとって1年間の日本語研修の最終段階であることを踏まえて、(1) これまで学んできた日本語の知識や技能を集約して最大限に表出させること、(2) 日本社会に対する理解をさらに深化させることを目的に加えた。そしてこれらを実現化するための学習活動としてプロジェクトワークを採用することにした。具体的には、学習者自身がテーマを決め、それについて主に音声・映像資料から知識を得た上で、最終的にビデオ作品を協同制作するという内容で授業設計を行った。

本稿では、まず今回の「ビデオ制作」プロジェクトのねらいとシラバスの概要について述べ、次に実際に実施した授業について報告する。そして、学習者の評価と教師観察に基づいて授業評価を行い、最後に「ビデオ制作」プロジェクトの日本語学習としての可能性について検討する。

1. 「ビデオ制作」プロジェクトのねらい

唯一絶対の教授法神話が崩壊して久しい現在、授業設計、すなわち「誰のために、何のために」を吟味した上で教育内容を決定し、その実践・評価・改善を行うことは、より効果的な、より良い授業を求めていくための有効な手段だと思われる。授業設計は教育工学分野の手法であるが、まず学習者の目的やニーズ、学習環境、周辺からの要請など、様々なニーズを分析して教育目標を設定する。それに学習者の特性を照らし合わせて、教授方法や教授メディアを選択し、授業計画を立てる。そして授業を実施し、それを評価し、さらに改善していくわけである。このような過程を通じて、教授方法やメディアの効果、およびより適正な処遇について組織的に明らかにしていくことは、実践の場では重要なことだと考える。

今回の授業設計にあたっては、カリキュラム全体の中でのワークショップの位置付けや対象学習者のレベル差等の条件を考慮した。ワークショップはある特定の技能を養成するための選択コースで、A-OW は聞き取り技能と口頭表現技能の養成に焦点が当てられている。A-OW1 の対象はJ3～J6 の学習者である。春学期において、J3 は Total Japanese の 28 課から、J4 は 31 課から、J5 は 34 課から学習が始められることになっている。また、J6 は Total Japanese を終了して中級前期の教材が導入されることになっており、レベルは初級後半から中級前半にわたっている。さらに、春学期は 1 年間の日本語研修の最後の学期である。これらの点を踏まえた上で前述のような授業目的を定め、「ビデオ制作」を最終課題とするプロジェクトワークを実施することにした。プロジェクトワークは、四技能の統合的な運用能力の向上だけでなく、異文化理解教育、内容重視の教育、自律的学習を実現する学習活動と考えられている。このため次のような場が提供できると考えた。

- (1) 聞く・話す技能を統合的に運用する場
- (2) 既習の知識・言語運用能力を総合的に表出する場
- (3) 学習者が興味のあるテーマで自主的・主体的に活動する場

(4) テーマを通じて日本文化・社会に関する知識や理解を拡大していく場

そして今回最もねらったのは、プロジェクト進行過程での協同作業による効果である。協同作業の有効性は、コミュニカティブ・アプローチや peer learning の研究等の中において主張されている。しかし今回は特に Vygotsky (1978) の「発達の最近接領域」理論を念頭に置いた。「最近接領域」というのは、自力で問題を解決できる水準と適切な援助があれば解決できる水準との間の領域のことである。学習者がこの領域において教師や熟達者などから適切な援助を受ければ、自分ひとりではできないことが可能になり、発達が促進されるという考えである。Scarcella and Oxford (1992) はこれに基づき「言語学習におけるインタラクションにおいて協同作業は適切な援助を与え言語習得を促進する」と述べている。今回のような学習者間のレベル差、知識と能力差を前提としたクラスにおいては、協同作業を通して、教師からの援助だけでなく学習者同士のより適切な援助が多く得られるのではないかと考えた。

また、プロジェクトの最終行動目標を「ビデオ制作」としたのは次の理由からである。

- (1) ビデオ・カメラは話す・聞くことによって成り立つ表現の道具であり、聞く・話す能力の運用に焦点が当てられる。
- (2) ビデオ作品の中だけでなく、制作過程においても既習事項を総動員することが求められる。
- (3) 制作のために協同作業を要する。
- (4) 作品を視聴することによって教師および学習者自身が表出したものを確認できる。

ビデオカメラで録画したものをを用いて学習者に直接的なフィードバックを与え学習効果を高めようとする利用法はビデオ機器の「カガミ的利用法」と呼ばれるものである。また、ビデオカメラが使用できる教育環境にあったことも必要条件として挙げられる。なお、ビデオ作品のテーマや形

態(ニュース形式, ドラマ形式, インタビュー形式等)は, 学習者の具体的なニーズや興味を事前に把握できないので, 教師が提示する例を参考に学習者が決定することとした。

以上, 本コースのねらいは, 日本に関するテーマについて協同作業でビデオ作品を制作する過程で, 学習者が主体的にこれまでに学んだ知識や話す・聞く能力を最大限に表出させることによって, また教師と学習者あるいは学習者同士が互いに援助し合うことによって, 一人一人の学習者の言語習得を促進することである。

2. シラバスの概要

シラバスでは, 最終行動目標の「ビデオ制作」に向けて必要となる知識や技能等の学習項目を抽出して, 全てがそこに収斂するよう構成することが求められた。今回のシラバスはプロセス・シラバスで, コース実施前には学習項目の一部だけを決めておき, テーマや作品の形態が定まる中で詳細を決定していった。コース前のアプリアリ・シラバスの概要を示すと次のようになる(図1)。ここでは, 学習項目として, 聞く・話す能力の基礎となる話し言葉の理解(意識化)およびビデオ・カメラ操作技能という大枠とその内容が決まっていた。

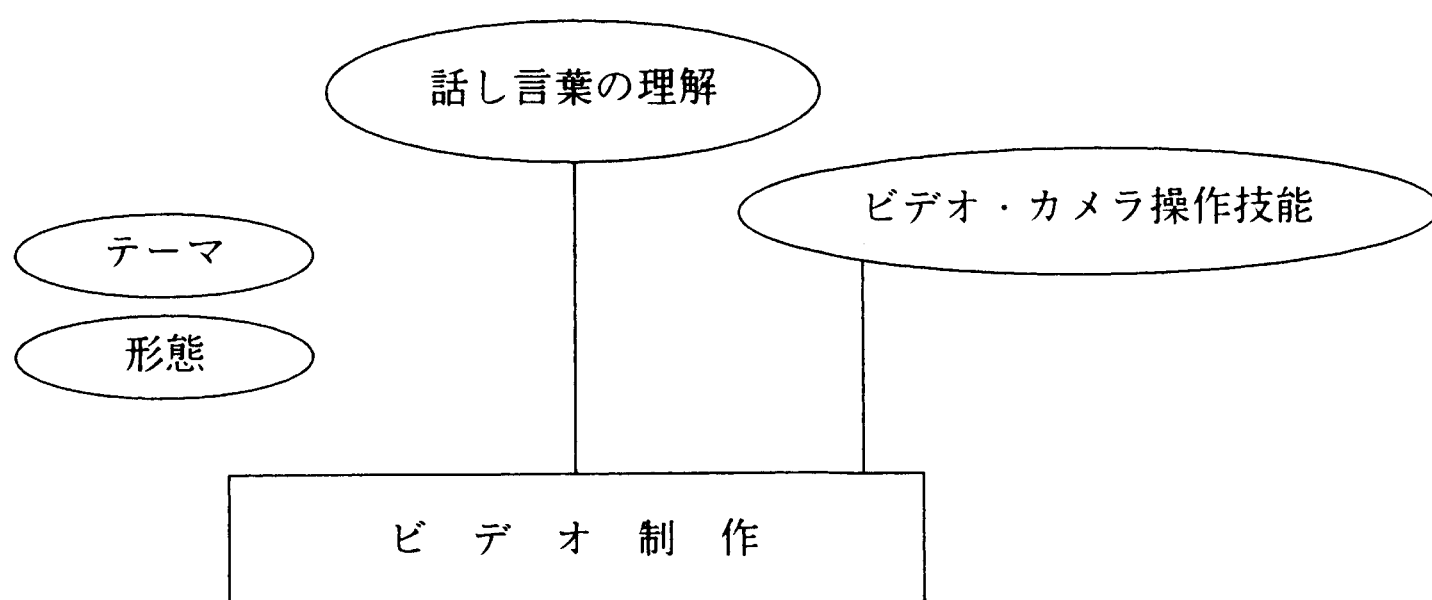


図1 アプリアリ・シラバス

コース進行に伴い「若者言葉」というテーマと「インタビュー番組」と

いう形態が決まり、そこで求められる学習項目の内容を具体化していった。このようにしてでき上がったアポステリオリ・シラバスの概要は図2のとおりである。

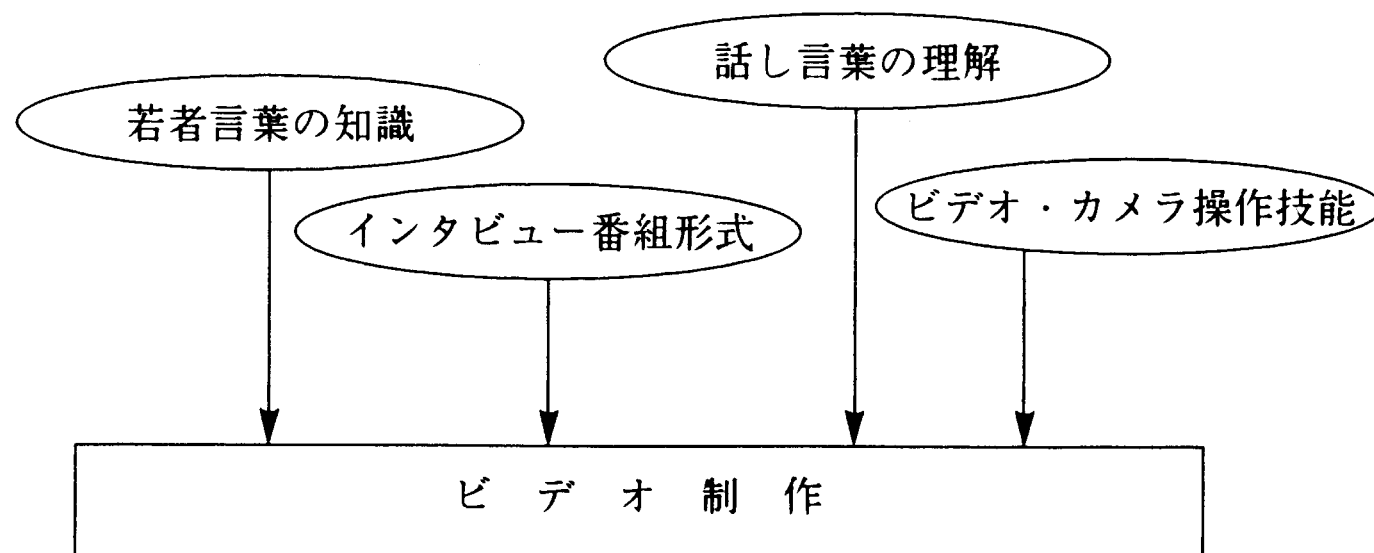


図2 アポステリオリ・シラバス

コースで取り上げた具体的な学習項目を聞く活動、話す活動に分けて記述してみると次のようになる。これを見ると、聞き取った言語形式を口頭で練習した後、実際の場面で使ってみてその反応を聞き取るという形で、聞く活動と話す活動が相互に関連づけられていることがわかる。

聞く活動

- ・話し言葉の音声的特徴を聞き取る / 意識化する (VTR)
- ・質問の仕方を聞き取る (VTR)
- ・インタビューの仕方を聞き取る (VTR)
- ・若者言葉を聞き取る (VTR)
- ・ビデオ・カメラの操作法を聞き取る (教師)
- ・インタビューの答えを聞き取る (日本人学生)
- ・感想を聞き取る (学習者)

話す活動

- ・討論する

- ・質問の仕方を練習する
- ・若者言葉の意味を質問する（宿題）
- ・インタビューの仕方を練習する
- ・シナリオを作成して口頭練習する
- ・インタビューする
- ・感想を述べる

3. 実際の授業

1998年4月6日から6月22日の間に週1回90分の授業が11回実施された。登録者は6名で、内訳はJ3が1名、J4が2名、J6が3名である。授業は次のような手順で実施された。

(1) オリエンテーション

- ・「ビデオ制作」という最終行動目標を明示し、スケジュールを説明する。
- ・ビデオ作品例として日本語教育映像教材「日本語でだいじょうぶ」のセグメントを1つ見せてイメージ作りと動機付けを行う。

(2) テーマの決定

- ・視聴したビデオ教材に関連付けてビデオのテーマと形態について数例提示する。
- ・ビデオ作品で扱いたい日本文化・社会に関するテーマについて希望を聞き出し、クラスでテーマを決めるよう指示する。
- ・クラス討論の結果、テーマが「若者言葉」と決定する。

(3) 話し言葉およびテーマに関するインプット

1) 話し言葉のインプット

- ・「日本語でだいじょうぶ」やドラマ「ロングバケーション」を見て話し言葉における音声的特徴等について聞き取りを行い、

意識化させる。

- ・漫画「クレヨンしんちゃん」の台詞をクラスで音読し、話し言葉の特徴を文字で確認させる。

2) テーマのインプット

- ・ドラマ「ロングバケーション」の中の若者言葉の聞き取りを行う。
- ・「場所」「大学生用語」「食べる」「気持ち」などに分類して若者言葉を提示し、宿題としてその意味を日本人に聞いて調べるように指示する。

(4) 形態の決定

- ・ビデオ作品の形態(ニュース, ドラマ, クイズ, インタビュー等)を決定するよう促す。
- ・クラス討論の結果ニュースの中に出てくるような「インタビュー番組」形式と決定する。

(5) 「インタビュー番組」制作の準備

1) インタビューの仕方

- ・ビデオ教材「日本語でだいじょうぶ」や「新サンデーモーニング」からインタビューの仕方を聞き取り、口頭練習する。

2) ビデオカメラ操作練習

- ・ビデオカメラの操作方法の説明を聞き、操作練習を行う。

3) 質問作成

- ・撮影におけるグループ分けをする。
- ・インタビューでの各自の質問を協力して作成する。

4) シナリオ作成

- ・インタビュー番組の流れと各々の役割, 順番等を相談する。
- ・相談に基づいてグループでシナリオを作成する。

5) インタビューに答えてくれる人の決定

- ・クラス討論の結果, 国際交流関係サークル(WIC)に教師が協

力を依頼する。

- ・協力者，日本人学生6名が決定する。

6) リハーサル

- ・実際にカメラで撮影しながら，クラスだけでリハーサルを行う。

(6) 撮 影

- ・日本人学生のグループ分けを行い，各々のグループに振り分け，撮影の流れについて事前打ち合わせる。質問には本番で回答することを指示する。
- ・インタビュー風景を撮影する。

(7) フィードバック

- ・ビデオを視聴し，各々の学習者の問題点を話し合う。

(8) 発表会

- ・協力者の日本人学生と共に完成したビデオを見て，プロジェクトに対する感想を発表する。
- ・日本人学生と意見交換を行う。

以上の授業の中で使用した教材をまとめると次の通りである。

(1) 日本語教育映像教材初級編「日本語でだいじょうぶ」(ビデオ)

ユニット1 セグメント2 新しい友達

セグメント6 ぼくがおごります

ユニット2 セグメント20 花火

ユニット4 セグメント35 子供部屋

セグメント36 インタビュー

(2) ドラマ「ロングバケーション」(ビデオ) 第1話の一部分

(3) まんが「クレヨンしんちゃん」1話分

(4) 報道番組「新サンデーモーニング」の1部

4. 授業評価

4-1 学習者による評価

最後の授業において、処遇の適否を知るため、およびコース改善に資するために学習者にアンケートを配り、5段階評価と自由記述方式で授業に対する評価を調べた。5段階評価では教材や活動などについて有用性、面白さ、重要性の3つの観点からの評価を、自由記述では教材、方法、レベルについて自由に意見や感想を書くことを求めた。以下にその結果をまとめたものを示す。

5段階評価

	有用性	面白さ	重要性
・「日本語でだいじょうぶ」	<u>3.5</u>	<u>3.75</u>	<u>3.5</u>
・「ロングバケーション」	4	4.25	3.75
・「クレヨンしんちゃん」	4	4.25	4
・宿題：若者言葉を調べる	3.75	<u>3.75</u>	<u>3.5</u>
・ビデオ制作活動	<u>4.25</u>	<u>4.75</u>	<u>4.25</u>
・シナリオ作成	<u>4.25</u>	4	<u>4.25</u>
・日本人学生へのインタビュー	<u>4.25</u>	<u>4.75</u>	4

自由記述要約

〈教材〉 ビデオと宿題が好き。/ まあまあ。

いろいろな種類があるので、とても面白い。

日本語の進歩に役立った。/ 面白くて使いやすかった。

これからも使ったほうがいい。

〈方法〉 fill in the blanks はまあまあ。/ よかった。

ビデオを見ながら script で勉強するのはすごく役に立つと思う。

クラスでいろいろなことをするのは役に立つ。

〈レベル〉 ちょうどいい。/ よかった。/ J3～J6 皆に役立つ。

J6 以下のためにちょうどいい。/ インタビューはちょっと難しかったけど、新しいことをたくさん習った。

5 段階評定の数字は平均値である。平均値は全て 3.5 を上回っており、自由記述のコメントからも今回使用した教材や教育方法、レベル設定は学習者にとって妥当であり、コースの設計・運営は概ね良好であったと言えるだろう。また、数字の下のもっとも長い線は各観点で評定の最も高いところを、またもっとも短い線は最も低いところを示している。これによると「ビデオ制作活動」は全ての点で最も高い評価を得ており、今回のような初級終了から中級前期程度と学習者のレベルに差のあるクラスにおいては最終行動目標として適切であったと言えるだろう。次に高い評価を得たのは「日本人学生へのインタビュー」であり、学習者に面白くて役に立つという印象を与え、学習者の動機を高めたと思われる。これに対して最も低い評価を受けたのがビデオ教材「日本語でだいじょうぶ」である。このような結果になったのは、このビデオ教材が他のものと比べて日本語教育用に制作されたもので、生教材ではなかったことが原因として考えられる。しかし、主因はむしろ活用方法にあったと思われる。つまり、今回のコースにおいてこの教材は質問の仕方、インタビューの仕方など言語形式を導入するために使用し、形式に注目させ聞きとらせた。平均値のもっとも長い線とっとも短い線の部分を比較して、言語形式に関する学習に対する評価が低く、意味中心の学習に対する評価が高い傾向にあることから分かるように、形式よりも意味に焦点を当てた学習に対する学習者の好みは強く、このため今回このような評価になったと思われる。

4-2 教師自身による評価

コース実施以前、教師はビデオ作品として主に短い「ドラマ」や「スキット」を想定して例を示した。しかし、最初の授業で聞き取り調査を行った結果、今回はドラマのシナリオを書くことおよびドラマで演技をすることに対する心理的な抵抗感が予想以上に強いことが分かった。「ドラマ」と

いう学習活動の難しさと、学習者のニーズや特性などを把握した上で、処遇を決定することの重要性を実感した。

また、今回インタビューの回答者として国際交流関係サークル「WIC」のメンバー6名の協力を得ることができた。コースの中で勉強してきた内容「若者言葉」について日本人学生に直接、改まった形で、ある程度知的な形式で質問をするということで、学習者はビデオ制作活動に熱心に取り組んだように思われる。また、インタビューにおいても一方的な質問に留まらず、「アメリカではどうですか」と逆に質問されて意見交換となり、異文化理解を深めることもできた。さらに、撮影途中に即興でCMを協同で作成することになるなど、学習者の自主的な活動の発展が見られた。それに加え、日本人学生との接触の中で、学習者が自分でうまく表現できない時に日本人の援助を受けて表現を豊かしていくことも観察できた。発達の最近接領域で適切な援助を受けると言語習得を促進できるという Vygotsky (1978) の考えに基づくと、このような援助が得られたのは非常に意義のあることだと言える。

5. 「ビデオ制作」の可能性

本コースの実施から、日本語学習における「ビデオ制作」活動は学習者の意欲を高め主体的な活動を導くなど、一定の成果を収めることが出来ることが示された。また課題内容(テーマ・形態)と学習者の適性との相互作用によって限界があることも示唆された。学習者からの評価も高かったが、その主な理由は、ビデオ制作を日本での日本語学習の集大成として位置付け、日本人との交渉を組み込み、現在の能力を最大限に表出することを求めた点にあると思われる。一方、学習者一人一人の最終的な聴解力、口頭表現力についてはビデオ作品の中でのインタビューのやり取りでも観察することができるが、どの程度能力が向上したかについては明らかにできなかったことが課題として残った。今後の授業設計では、このような個別評価システムに配慮する必要があるだろう。

今回の結果から、「ビデオ制作」が日本語学習において何を可能にするかを整理してみると、次のようなものが挙げられる。

- (1) 話す・聞く技能の運用の場を提供し、統合的運用能力の養成ができる。
- (2) 学習者の意欲を高め、自主的な行動を引き出すことができる。
- (3) 「カガミ的使用」によって正確さの教育ができる。
- (4) 「カガミ的使用」によって自己修正能力の養成ができる。
- (5) テーマを通して日本文化・社会の知識の拡大できる。
- (6) テーマを通して、また日本人との交渉を組み込むことによって異文化理解教育ができる。
- (7) 協同作業の過程で教師や学習者同士および協力者の適切な援助が得られる。
- (8) テーマと形態によっては初級段階でも実施できる。

以上の点からみて、「ビデオ制作」プロジェクトは、単一の授業目的のために、また多様な目的のために利用することのできる可能性を持った学習活動であると言えるだろう。

参考文献

- Scarcella, R. C. and Oxford, R. L. (1992) *The Tapestry of Language Learning: The Individual in the Communicative Classroom*, Heinle and Heinle Publishers.
- Vygotsky (1978) *Mind in Society, The development of higher psychological process*, Harvrd University Press
- 大内茂男・中野照海編 (1982) 『授業実践に生かす教育学シリーズ第1巻 授業の設計と実施』(図書文化社)
- 国立国語研究所 (1995) 『日本語教育指導参考書 21 視聴覚教育の基礎』
- 波多野誼余夫編 (1982) 『認知心理学講座 学習と発達』(東京大学出版会)

付 記

今回授業で使用した日本語教育映像教材初級編「日本語でだいじょうぶ」(ビデオ)は、国立国語研究所日本語教育教材開発室の「映像教材モニター」として試用させていただいたものである。